



Title	古賀英三郎先生の思い出
Author(s)	渡辺, 雅男
Citation	一橋大学社会科学古典資料センター年報, 11: 20-21
Issue Date	1991-03-30
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	<a href="http://doi.org/10.15057/5499">http://doi.org/10.15057/5499</a>
Right	

# 古賀英三郎先生の思い出

## To the Memory of Professor Eisaburo Koga

渡 辺 雅 男  
WATANABE Masao

1990年12月1日の朝、古賀英三郎先生は亡くなられた。夏の初めに、身体の不調を訴えられ、検査・手術・再入院と秋の日を短い闘病に費し、冬の訪れとともに、われわれの前から永遠に去っていかれた。いま先生を失ってみて、埋めようもない喪失感と耐えようのない寂寥とにうちひしがれているのは、私だけではないだろう。人生にも春夏秋冬があるように、また、人の生活にいくつもの顔があるように、古賀先生の思い出をどの時期、どの面で紡ぎだしたところで、しょせんそれは先生の生きてこられた人生の広がりや深みに見合うものではない。しかし、あえてそれを承知で、教育者としての先生、研究者としての先生のなかを「貫く棒の如きもの」を探すとしたら、なにをおいても、それが古典との絆、あえて言えば先生の古典意識であったといっても、間違っていないだろう。

教えを受け続けた20有余年、先生のもっともよく口にされていた言葉が「古典を読み」であった。時代の風雪に耐えた古典的著作と格闘することによってのみ「時流に流されないで自分で考え判断する力＝橋頭堡としての世界観を自分のなかに築く」ことが可能なのだ、と学生にむけて語っておられる（「すすめたい書物」『小平学報』第93号、1986年4月）。あるいはまた、古典の魅力をその独創性、全体性、批判性、根元性に要約されて、専門家にむけて語ることもあった（第8回「西洋社会科学古典資料講習会」における講義）。要は「自分の古典」をもつことだ、と主張されたのである。

事実、研究者としても、先生は自らそれを実践された。モンテスキュー研究の第一人者として知られる先生にとって、モンテスキューがその古典であることは自明のように思える。しかし、先生の研究生活の出発点は、A・コントであった。先生は、その助手論文「コント社会学の基本構造」（『社会学研究』1、1956年）でゲオルグ・ミシュの見解、つまり、18世紀のグランベールやチュルゴから、19世紀のサン・シモンを経てコントに至るフランス実証主義の連続性を強調する見解にたいして、このフランス実証主義の流れには、サン・シモンによる断絶があり、この断絶なしには、コントにおける社会学の形成はありえぬことを論じた。秩序（静態論）と進歩（動態論）の統一をはかるコントの社会学の構想が中世的価値と近代的価値との統一にあることを明らかにしたこの処女論文は、フランス社会学思考の源泉がコントにではなくそれ以前に存在することを確認するものであったから、先生にとっての「私の古典」の探求の旅はすでにこのとき開始されていたのである。モンテスキューへの着目はこの論文の翌年発表された「モンテスキューの思想と科学についての若干の考察」（同上誌、2、1957年）でなされている。モンテスキューの人間観と自然法、道徳論と歴史意識、政治的実践的志向について論じた本論文こそ、若き先生が終生の古典を定めた誇らかな宣言であり、その後の先生のモンテスキュー研究の本格的な出発点をなすものであった。その後、先生は「モンテスキューの土地経営」（同上誌、14、1975年）で歴史研究の視角から、「ウェーバーとフランス」（『知の考古学』1976年8・9月）で理論研究の視角

から、後の大著『人類の知的遺産・モンテスキュー』（講談社、1982年）の構想を予告し、そのモンテスキュー像をより具体的に打ち出していかれるのである。しかし、先生自身しばしば生前おっしゃっていたことではあり、またその「まえがき」にも書かれていることだが、世評高く、版を重ねるこの著書は先生にとって意を十分つくすものではなかった。この著書の続編を書くことを強く望んでおられたことを思うと、先生の早すぎた死は無念の思いとなって胸にせまってくる。しかし、先生が身をもって示された古典意識の現代化の試みは、その未完の構想部分を含め、後に続く者へ永遠の道標となって生きつづけることに変わりはない。（一橋大学社会学部助教授）

## 1990年センター日誌・報告

### 第10回西洋社会科学古典資料講習会

第10回講習会を下記の日程で開催し、33名が受講した。

- 10月3日 ①アダム・スミスと日本 杉山忠平 ②西洋古版本研究における図書館員の役割 東田全義 ③情報交換・座談会
- 10月4日 ①AssociationとSocialisme 永井義雄 ②古典資料の書誌情報とデータベース化 永田治樹 ③19世紀経済思想研究からみたイギリスの図書館事情 西沢保
- 10月5日 ①西洋古版本事情——日本大学図書館の所蔵資料に即して—— 坂上育子・小林章子 ②古版本のかたち 岡本幸治 ③情報交換・座談会
- 10月6日 ①アルフレッド・マーシャルとケンブリッジ学派の経済学 美濃口武雄

### 日誌（1990）

3月31日 年報10号発行

スタディシリーズ No.20：西洋中世における個人（人格）の成立に関する予備的考察 阿部謹也 No.21：シュンペーターの「アンナの日記」 塩野谷祐一 No.22：『法の精神』の祖型（続・完） 渡辺金一 発行  
古賀英三郎センター教授任期満了

4月1日 永井義雄教授、名古屋大学経済学部よりセンター教授に就任

4月9日 第34回運営委員会 議題：①第10回講習会について、他

4月 スミス没後200年記念展示

5月24日 第35回運営委員会 議題：①平成元年度事業報告 ②平成元年度決算報告 ③平成2年度事業計画について ④平成3年度概算要求について、他

7月 小展示：ジョン・ロック著『統治論』と『人間悟性論』

10月3～6日 第10回西洋社会科学古典資料講習会

12月1日 古賀英三郎前センター教授死去

### 利用状況1990

期 間	開館日数	利用者数	利用冊数	見学者数
1978年3月～89年12月	3,347	4,900	27,357	399
1990年1月～12月	279	385	2,218	29
累 計	3,626日	5,285人	29,575冊	428組